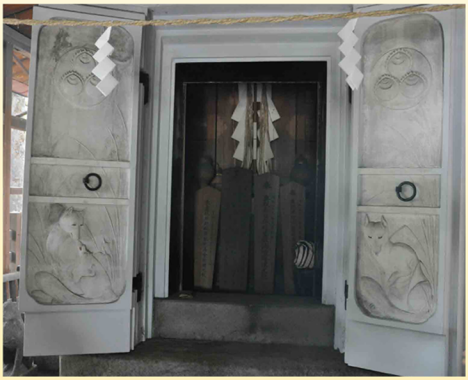
伊豆長八 と こて絵

伊豆松崎出身だったことから「伊豆の長八」とも呼ばれる入江長八（1815～1889）は、建物の壁面に漆喰を塗った上に、左官道具の「こて」を使って模様や風景を描く「こて絵」の名工として知られた職人です。左官修行の傍ら狩野派の画法を学び、華麗な色彩と立体的な彫刻とを併用することで独自のこて絵芸術を完成させました。長八のこて絵は関東や静岡に点在しますが、足立区では有形文化財として二点のこて絵を登録している他、千住の橋戸稲荷神社（有形文化財）の本殿扉に「親子狐」のこて絵が残っています。



▲「鏝絵・潮汲みの図」（ 区登録有形文化財、柳原1丁目、個人蔵）

▲橋戸稲荷神社本殿扉に施された「親子狐」のこて絵
通常はレプリカを見ることができ、2月3日、5月15日、例祭（9月15日に近い日曜日）の年3回、本殿が開帳され、参拝者に披露される。橋戸稲荷神社の本殿は、区内唯一の土蔵づくり本殿としても知られています。

こて絵の制作方法

こて絵は、土蔵などの土塗り壁の上塗りに用いられる漆喰を材料としています。漆喰で形を作った後に上から彩色する方法と、漆喰を塗る際に直接顔料を練り込んだ色つきの漆喰で形成する方法があります。これらの方法と数種類のこて・竹べらを使って立体的な絵を構成していきます。漆喰を塗る作業は、塗りと乾燥の繰り返しなので、こて絵は時間と手間をかけて丹念に作られていくのです。